



今年も猛暑が予想されています。今から水稻の高温障害対策を始めましょう！

本田初～中期の水管理



田植え直後から生育中期（最高分げつ期ころまで）の水管理は、収量や品質に大きく影響します。水管理を上手に行い、夏季の高温で発生する乳白米などの発生を少なくし、**高品質米の生産**をめざしましょう。

1. 田植え後は浅水管理！

- ・田植え後は水深 2～3 cmの浅水として水温を高め、活着と生育の促進を図ります。低温の時は 5～6 cmの深水にして保温に務めます。

速やかに活着し生育が促進されると茎数（主稈・分げつ）が増加して穂数が多くなり、多収となります。

2. 除草剤の効果を高める止水管理！

- ・薬剤処理後 7 日間は落水せず止水管理とします。水位が下がり田面が露出した時は、静かに入水し補充します。除草効果を確実にするために、中干しの開始（田植え後 40 日程度）までは湛水状態とします。

早期の落水は除草剤成分の流出や、処理層形成を不十分にしてしまいます。施用後は処理層が壊れないように湛水状態を保ちます。除草剤の効果を高めるポイントについては、[営農 News3230 号\(3 月 31 日発行「水田除草剤の剤型の特性と注意点について」\)](#)を参照してください。

3. 中干しは高温障害(乳白米などの多発)対策の大事な一つ！

- ・田植え後 40 日ころから落水し、中干しを開始します※。期間は 5～10 日間とし、田面にひび割れができる程度行います。湿田や有機物が多い水田は強めに、水持ちの悪い水田は軽に行います。
- ・遅くても幼穂形成期（出穂前 30 日ころ）には終了します。
- ・中干しが終わったら、入水と自然落水を組み合わせた間断かんがいを行います。

※中干しは茎数（主稈・分げつ）の数が必要な穂数と同じになったら（コシヒカリの場合株あたり 20～25 本くらい）始めます。生育が早い場合は田植え後 30 日ころから始めることができます。



中干し時に雨などで排水が容易に進まない時は、水尻（排水口）を低くしたり、暗渠の水甲を開けたりし、できるだけ落水するように努めます。

中干しの目的の一つは根を健全にすることです。根の活力を維持し、生育後半まで養分・水分を十分吸収することにより生育を良好にし、乳白米などの発生を抑えます。

もう一つの目的は過剰分げつの抑制です。分げつが多すぎると穂数（モミ数）が必要以上に増加し、モミの中へのでん粉蓄積が悪くなり、乳白米などが多くなります。穂数・モミ数を適切にし（コシヒカリで株あたり穂数 20～25 本程度が目標）モミ中へのでん粉蓄積を十分にしておき、乳白米などの発生を抑えます。

さらに、中干しにより土が固まります。そのことにより、コンバインを水田に入れるため、収穫前に早くから落水する必要がなくなり、水分が供給されてモミが後半まで充実するので、収量・品質の向上が期待できます。

◎高温障害対策全般は、[営農 News3208 号\(1 月 7 日発行「暑さに負けない米づくり」\)](#)を参考にして下さい。



- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。